古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 246 号（2023 年 5 月）

漢語音を表記する満洲文字――特殊文字 k’/g’/h’の使用について――

中村雅之

１．問題点

満洲文字は当初、モンゴル文字をほぼそのまま採用していたため、表記上 k/g/h などが区別されなかった。1632 年になって、字母を変形させたり圏点（丸や点）を添えたりして、全ての音素を区別する表記体系、すなわち有圏点満洲文字が考案されたが、その際、モンゴル語と満洲語以外の言語（とりわけ漢語）を表記するのに必要な特殊文字も作られた。満洲語の行政文書には人名・地名・官職名などの漢語語彙が必須であることから、「ga/ka/ha」「zi/ci/si」「zhi/chi/ri」（ピンイン表記を「　」で示す。以下同）などを表記する必要があり、既存の字母の変形や、記号の付加によって、新たな表記が作られることになった。

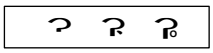
しかし、これらのうち「ga/ka/ha」を表すための特殊文字は、実際の資料においては決して規範どおりに運用されていない。以下にはその状況を報告するとともに、規範と運用が一致しない理由についても考えてみたい。

２．口蓋垂音と軟口蓋音

口蓋垂音［qʰ］［ɢ］［χ］と軟口蓋音［kʰ］［ɡ］［x］は満洲語では明瞭に区別され[1]、文字上でも異なる字形を用いている。一般に利用されているメレンドルフ式のローマ字転写[2]では、この 2 系列を区別せずに｛k/g/h｝とする。（メレンドルフ式の転写を｛　｝で示す。以下同）

k　g　h　　k　g　h

左の口蓋垂音には｛a/o/ū｝のみが結合し、右の軟口蓋音には｛e/u/i｝のみが結合する。相補分布をなすことから、メレンドルフは両者を｛k/g/h｝という 1 系列でまとめたのであろう。この処理の仕方には大いに議論の余地があるのだが、本稿の主旨からは外れるので、ここでは暫時、メレンドルフ式の表記に従っておく。

漢語音の表記に際しては、｛-e/-u/-i｝が接続する場合には軟口蓋音の  をそのまま用いる。しかし、｛-a/-o/-ū｝が続く場合にはこれを用いず、また満洲語の口蓋垂音を表す子音も用いずに、新たに作成した文字 を用いることになっている。Windows のフォントでは字形が不明瞭なため、今『満漢字清文啓蒙』(1730) [3]からコピーし

---

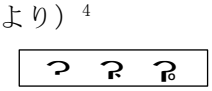
[1] 破裂音に関しては、無声と有声の対立か、有気と無気の対立か、清代における状況を正確に知るのは難しい。20 世紀における満洲語諸方言の調査などから見れば、17 世紀前半における状況は、無声有気と有声（ないし半有声）と考えて大過ないのであろう。

[2] Möllendorff (1892) *A Manchu Grammar, with Analysed texts*, Shanghai.

[3]国立公文書館デジタルアーカイブの旧「紅葉山文庫」本による。

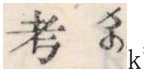
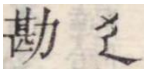
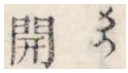
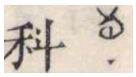
た。メレンドルフの転写ではそれぞれ{k‘/g‘/h‘}であるが、以後、表示の便宜上、{k’/g’/h’}で示す。上部が「×」になっているのが特徴であるが、これには2本の髭を付けたような形の異体字がある。

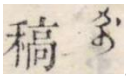
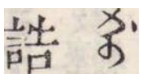
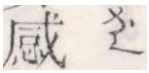
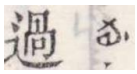
（『清漢對音字式』より）[4]

このように、漢語音の「ke-/ge-/he-」などには  を用い、「ka-/ga-/ha-」などには特殊文字{k’/g’/h’}を用いる。どうしてこのようになるかと言えば、これまでの研究ですでに説明されているとおり[5]、漢語の「ka-/ga-/ha-」などが軟口蓋音だからということであろう。満洲語では{-a/-o}の前では口蓋垂音と決まっているので、{軟口蓋音＋a/o}という組み合わせがない。満洲人にとって軟口蓋音と口蓋垂音とは全く異なる子音であるから、{軟口蓋音＋a/o}を明示するために新たな文字を考案する必要があったのである。

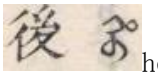
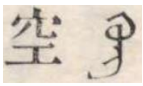
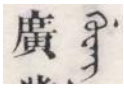
『御製増訂清文鑑』(1771)[6]からいくつかの使用例を挙げておく。

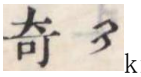
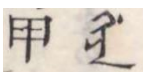
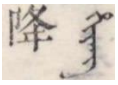
<-a/-o＋特殊文字>

 k’ao  k’an  k’ai  k’o

 g’ao  g’ao  g’an  g’o

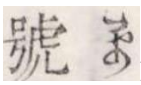
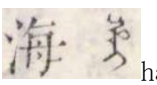
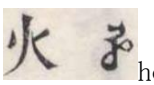
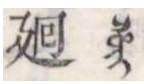
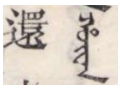
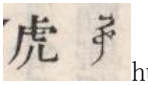
<-e/-u/-i＋既存の軟口蓋音>

ke  heo  kung  guwang huwe

 ki  giya  hiang

３．摩擦音{h’}はほとんど使われない

『満漢字清文啓蒙』(1730)に示されるように、規範的な表記としては、破裂音と同様に摩擦音でも{h’ao}{h’ai}{h’o}のようになることが期待されるが、実際の資料を見るとそのようにはなっていない。まず『御製増訂清文鑑』を見ると、以下のようである。

 hao  hai  ho  hūi  hūwan  hū

つまり、{-a/-o/-ū}が接続する場合には、特殊文字{h’}ではなく、満洲語と同様に口蓋垂音を表す子音が使われる。「火」のように表記にゆれがある場合でも、{-u}と結合する場合には軟口蓋音の子音を用い、{-o}と結合する場合には口蓋垂音の子音を用いている。

---

[4] 乾隆37年（1772）上喩。拓殖大学図書館蔵本による。

[5] 河内良弘（1996）『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。57-58頁参照。

[6] 国立公文書館デジタルアーカイブの旧「紅葉山文庫」本による。

この状況を表にすると次のようになる。

漢語の声母	-a	-o	-ū	-u	-e	-i
[k^h]	k'a	k'o	( )	ku	ke	ki
[k]	g'a	g'o	( )	gu	ge	gi
[x]	ha	ho	hū	hu	he	hi

ただし、『御製増訂清文鑑』の漢語表記において {hu} は稀である。満洲語では {hū} と {hu} で表記される音節は異なる音であり、音韻論的にも対立しているが、漢語においては {hū} と {hu} は同音であり、表記上のバリエーションに過ぎない。

『増訂清文鑑』では特殊文字 {h'} は使用されないようであり[7]、早田輝洋 (2009) [8]も {h'} について「文字の紹介、辞書の見出し字として以外に、満洲語文献にこの文字の使われた例を筆者は知らない」(p.147) と述べる。しかし、次節に述べるように、厳密には {h'} が全く用いられないわけではない。

４．他の資料の状況

手元にあるいくつかの複写資料やインターネット上の画像を用いて、{h'} の使用状況を確認してみた。使用した資料は、『清書千字文』(1685)、『満漢千字文』(17c.後半)、『満漢同文雑字』(17c.か？)、『兼満漢語満洲套話清文啓蒙』(1761) である。これらの資料では {k'} {g'} に関しては規範どおりに用いられているので、ここでは {h'a} {h'o} および {hu (軟口蓋音＋u)} の状況について報告する。

ａ．『清書千字文』[9]

{h'a} {h'o} {hu (軟口蓋音＋u)} は用いられず、『増訂清文鑑』と同様に、「好 {hao}」「河 {ho}」「皇 {hūwang}」「會 {hūi}」など、口蓋垂音が用いられる。

ｂ．『満漢千字文』[10]

{h'} が用いられるのは、「海 {h'ai}」と「火 {h'o}」の２字。それ以外は『清書千字文』と同様に口蓋垂音が用いられる。

---

[7] 『増訂清文鑑』は膨大な分量があり、全巻を詳細に調査した訳ではないが、{h'} が用いられたとしてもごく少数にとどまるであろう。

[8] 早田輝洋 (2009)「満洲字概説―有圏点満洲字篇―」久保智之・林徹・藤代節編『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』pp.129-167。

[9] 国立公文書館デジタルアーカイブ『千字文註』(図書番号：漢 13484) による。

[10] 岸田文隆 (1994)「パリ国民図書館所蔵の満漢「千字文」について(1)」『富山大学人文学部紀要』21、pp.77-133 および岸田文隆 (1995)「(資料景印) パリ国民図書館所蔵満漢「千字文」」『富山大学人文学部紀要』23、pp.113-132 による

ｃ．『満漢同文雑字』[11]

{h'a} {h'o} {hu（軟口蓋音＋u)} は用いられず、口蓋垂音が用いられる。「海 {hai}」「漢 {han}」「湖 {hū}」「灰 {hūi}」「皇 {hūwang}」「花 {hūwa}」「紅 {hūng}」など。

ｄ．『兼満漢語満洲套話清文啓蒙』[12]

{h'} が用いられるのは「孩 {h'ai}」「害 {h'ai}」「好 {h'ao}」「号 {h'ao}」「罕 {h'an}」「汗 {h'an}」で、使用例は比較的多い。同時にまた、「哈{ha}」「和{ho}」「火{ho}」「海{hai}」「含{han}」「漢{han}」など、口蓋垂音を用いるものも多くある。

{hu（軟口蓋音＋u)} は「化{huwa}」「坏{huwai}」「悔{hui}」「欢{huwan}」「謊{huwang}」など頻繁に見られる。同時に、{hū（口蓋垂音＋ū)} も「話{hūwa}」「花{hūwa}」「戸{hū}」「會/会{hūi}」「黄{hūwang}」など相当数ある。

要するに、『兼満漢語満洲套話清文啓蒙』における{h'}および{hu/hū}の使用に関しては、規範的な表記とそうでない表記が混然一体となっている。

５．満洲語話者から見た漢語の/h/

清初の満洲文字改革において、母音 {a} {o} と結合する軟口蓋子音を表記するための文字としてわざわざ {k'/g'/h'} が作られたにもかかわらず、摩擦音の{h'}に関しては、それを用いない資料が多い。{a}{o}の前では満洲語と同様に口蓋垂音を用いるのである。また、規範では漢語の「hu」を {hu}（軟口蓋音＋u）で表すことになっていたが、これも実際には {hū}（口蓋垂音＋ū）の方が主流と言える。『兼満漢語満洲套話清文啓蒙』のみは規範的な表記が多数見られるが、徹底されてはいない。

このような状況が生じた理由は、最も単純に考えれば、漢語の「h」が満洲人の耳には軟口蓋音ではなく、口蓋垂音に聞こえたからなのであろう。ピンインの「ga」「ka」の声母は軟口蓋音に聞こえたが、「ha」は口蓋垂音に聞こえた。そのため、軟口蓋音のための文字{h'}を用いず、口蓋垂音の{h}を用いた。「hu」に関しても、規範のように軟口蓋音を用いた{hu}よりも口蓋垂音の{hū}が好まれたということになる。文字の構造上、口蓋垂音{h}の後に母音{u}を続けることはできないので、{hū}で「hu」を表したものである。

理屈としてはこれで一件落着ということになるが、漢語の「h」がどのような音かということを考えると問題はそれほど単純ではない。まず、漢語の「h」は北方では軟口蓋音［x］で、南方では声門摩擦音［h］だというのが一般的な認識である。そのような説明の一例として以下に藤堂明保（1980）[13]を引用しておく。

ただここで一言しておきたいことがある。中古の「暁」母「匣」母字は、今日の南方

---

[11] 中嶋幹起（1994）「北京図書館蔵「清字解學士詩」の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』46･47 合併号 pp.97-159 による。

[12] 東洋文庫蔵本の複写と、竹越孝（2001）「『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』満洲文字注音一覧表」『KOTONOHA』101、pp.9-19 による。

[13] 藤堂明保（1980）『中国語音韻論――その歴史的研究』光生館。

系諸方言では、一般に＜喉音＞（laryngeals）のマサツ音、すなわち音声記号［h］［ɦ］で表されるような音となっているが、官話系の諸方言（北方系）では舌根のマサツ音、つまり音声記号では［x］で表される音となっていることである。(p. 189)

このような立場から見れば、満洲語話者が北方の漢語を耳にした場合、「h」を口蓋垂音として聞くという可能性はさほど高くないことになる。しかし実際には「ha」「ho」「hu」の声母を満洲文字では口蓋垂音の｛h｝で表記しているのである。このことは、北方漢語の「h」も実際にはかなりの異音（allophone）があり、満洲語の［x］と同一視できなかったことを示している。少なくとも、漢語の「g」「k」が明瞭な軟口蓋音として聞こえたのに対して、「h」はそうではなかった。そうであるからこそ、破裂音では軟口蓋音｛g'｝｛k'｝を用いたが、摩擦音では｛h'｝を用いずに口蓋垂音｛h｝を用いたのであろう。

さらに、満洲語自体の音としても、男性母音の前の「h」は通常口蓋垂音とされるが、常にそうであったかどうかは確定できない。1930 年代に新疆の満洲語方言を調査した服部四郎（1937）[14]は｛a｝｛o｝と結合する｛h｝を声門摩擦音［h］で表記している。音声に厳格な服部氏の表記であるから、［χ］と表記しなかったことには意味があるのであろう。つまり、満洲語においても方言差や個人差などがあり、男性母音と結合する｛h｝は［χ］～［h］でゆれがあった。

以上をまとめれば、清代の漢語ではおそらく「h」の音声に［x］［χ］［h］などのバリエーションがあり、満洲人は特に｛a｝｛o｝の前では口蓋垂音｛h｝で表記するのを是とした、ということになる。

６．ダハイ（達海）の文字改良の実態

有圏点満洲文字は 1632 年にダハイ（達海）が太宗ホンタイジの命を受けて、それまでの無圏点満洲文字を改良して完成したものとされる。つまり、『満漢字清文啓蒙』(1730) に見られるような字形や綴字法の規範は、ダハイによって作られたと考えるのが一般的である。しかし、上に見たように、漢語用の特殊文字｛h'｝はあまり用いられない。特に 17 世紀の資料でほとんど見られないことから、ダハイの作成した特殊文字の中にはもともと｛h'｝がなかったのではないかという疑いが生じる。つまり、｛k'｝｛g'｝はあったが、｛h'｝はなかった。『満漢字清文啓蒙』(1730) のように｛k'｝｛g'｝｛h'｝がそろっているのは文字の体系を意識して後に作られたもので、ダハイの文字リストには｛k'｝｛g'｝しかなかったのではないか。

『大清太祖武皇帝実録』は 1636 年に成ったとされるものであるが、今西春秋（1967）[15]によって検すれば、そこに見える漢人名・地名の表記に｛h'｝は用いられていない。もしもダハイが｛h'｝を作っていたならば、そのわずか 4 年後に成った『大清太祖武皇帝実録』がな

---

[14] 服部四郎（1937）「満洲語音韻史の為めの一資料」『音聲の研究』6。

[15] 今西春秋（1967）「影印〔満文〕大清太祖武皇帝実録」『東方学紀要』2、pp. 173-273。

ぜ｛h'｝を使用しないのか、説明がつかない。

ダハイは｛h'｝を作らなかったが、その後｛k'｝｛g'｝からの類推で｛h'｝を用いるものが現れたため、『満漢字清文啓蒙』(1730) が刊行される際には、その文字リストに｛k'｝｛g'｝とともに｛h'｝が載せられるに至ったのであろう。そのような状況を受けて、『兼満漢語満洲套話清文啓蒙』(1761) では｛h'｝が頻繁に使用されるわけである。

要するに、本来は｛h'｝を用いないのがダハイ以来の規範であり、官製の『御製増訂清文鑑』(1771) などはそれを忠実に守っていると言えるが、民間に広まった満洲語学習書では勝手な解釈あるいは思い込みによって｛h'｝を用いることがあった。そして、その解釈がきれいな体系をなしていたために、清初以来の規範であると誤解をして現在に至ったというのが実情であろうと想像する。